石井さんの逝去を悼む

大　戸　千　之

石井さんが逝去されたという報せは衝撃であった。

最近は、お会いする機会が少なくなっていて、今年のはじめであったか、文学部の事務室でお会いしたのが最後となった。いつもと同じで、軽く挨拶を交わしたが、彼は授業のあいまのあわただしい時間だったらしく、ゆっくりと話すことはできなかった。そのときのことをよく憶えているのは、長田理事長がめずらしく事務室に顔を見せていて、二人で顔を見合わせたからである。

そのときは少しも変わりなく元気そうにみえた。スリムで肥満とは縁遠い体形から高血圧を推測することはむずかしかった。スポーツマンというよりは文学青年という印象のほうが強かったが、あるとき、学生時代にはラグビーをやったときいたことがある。色白であったけれども、頑健な質だと思いこんでいた。タバコが好きだということは知っていたが、まさかこのようななりゆきにつながるとは、思いもよらなかった。人の寿命とはわからぬものだと、いましみじみ感じている。

石井さんは大学院を出てすぐ立命館に赴任されたから、もう35年を越えるおつきあいであった。こちらにこられてからしばらくして、文学部の若手教員を中心に懇親を目的とした青麦会という集まりができた。石井さんは中心メンバーの一人で、名付け親となったのも石井さんではなかったか。折々場所を変えては集まって、食事を楽しみながらいいたいことをいいあった。互いが親しくなり、考えもつうじあうようになって、なかなかいい会であったと今も思っている。メンバーがしだいに齢をとり、青い麦と称するのはもうふさわしくないかと笑いあうようになってから、集まる回数も減っていったが、思い起こせばいろいろと懐かしい思い出が多い。

昔風の文学者気質で、学位というものを軽蔑しようとした最後の世代とお見受けした。筋の通らぬこと、まがったこと、一貫しないことが嫌いで、教授会での発言はほとんどそうした姿勢からのものであったと記憶する。誰かが口をはさもうとしても、断固として発言をつづける一徹さも目立った。

授業はきびしかったが、ポイントを押さえて教えると、ズルズル引きのばさず、さっと切り上げるので、学生には好評だったようである。長身でクールでアスコットタイが似合う風貌は、とくに女子学生に人気があったらしい。われわれの専攻の同窓会で、「先生がたには申しわけないけれど」、石井先生にあこがれてバレンタインのチョコレートをもっていったのが今となってはなつかしいと、ある卒業生が話すのを聞いたことがある。

教えた学生のことをよく憶えておられた。専攻の同僚と卒業生や院生のことについて話しているとき、たまたま傍にいた石井さんから、彼はよくできたとか、彼は頭はいいはずなのにサボるものだから試験の成績はもうひとつだったとか、話をきかされて、よく憶えておられると感心したことが一再ならずあった。熱意をもって教えてこられた証拠であろう。

個人的なことになるが、わたしが学部長をつとめたときには、副学部長（調査委員長）として、ずいぶん援けてもらった。ほんとうは別の役職を頼もうと考えて相談に行ったのだが、そちらは固辞

され、かわりに調査委員長ならやってもよいといわれた。しんどいポストであるから、申しわけないとは思ったが、せっかくのお申し出なので、ありがたくお願いすることにした。おそらく、むずかしい時期であるし、援けてやらねば危ういと思われたのであろう。

執行部会議の日には京大で授業があり、いつもやや遅れて慌ただしく駆けつけてこられた。しかし、抜群の記憶力で、過去のいきさつや取り決めの内容をしっかりと憶えておられ、それを踏まえて助言や提案をされる。問題を進めようとするさい、先例にならうだけでは進歩がないが、先例を踏まえないことには矛盾や混乱をきたして説得力を欠くことになる心配が大きい。その意味で、まことに頼りになる存在であった。全学の会議でも、常に一目置かれていたときいたが、当然であろう。

いつも自宅から自転車で大学に通われ、明かりを落とした、やや薄暗い個室にこもって仕事をしておられた。一度外留されたほかは、内留もほとんどとられなかったのではないか。研究のうえでのはなやかさはなかったかもしれないが、しっかりした蓄積を感じさせる人であった。

わたしなどよりはずっと元気と思いこんでいたのに、人の一生というのはわからぬものである。

ありし日をしのびつつ、心からご冥福をお祈りしたい。

（衣笠総合研究機構特任教授）